

2019年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会 最優秀賞（岐阜地方法務局長賞）

私のホストマザー

恵那市立恵那西中学校2年 安江 史笑

今年の夏、私は恵那市国際交流協会が主催する、オーストラリア派遣事業の研修へ参加しました。期待と不安を胸に、オーストラリアへの向かう飛行機の中で、私がお世話になるホストファミリーからの手紙を受け取り読みました。「あなたの事が待ち切れません。とてもわくわくしています。早く会いたい。」と書いてあり、とても嬉しかったです。同封されてある写真を見た時、私はドキッとしました。そこには電動車いすに乗るホストマザーが写っていたからでした。車いすの人と関わった事のない私が、ちゃんとホストマザーの手助けが出来るのだろうか不安になりました。オーストラリアに着き、ホストファミリーに会う時、不安な気持ちを気付かれない様に、私は精一杯の笑顔を生懸命作りました。

初めの頃私は、車いすのマザーにとっても気を使ってしまい、色々手助けしてあげなきゃと思っていました。しかし、何をどこまで手伝えば良いのか分からず、戸惑いもどかしい気持ちでいました。夜、ホストファミリーと外食へ出かけた時、私はとても驚きました。車のドライバーがマザーだったのです。車いす用に作られている車をマザーは慣れたように操作して、運転も車への乗り降りも全て自分でしていました。大変だろうから、何か手伝わないか、と思い車の後ろのドアを閉めようと手を掛けた時、「大丈夫よ。一人で出来るのよ。」と笑顔でマザーは言いました。その言葉通り、マザーは私が滞在している間、ほとんどの事を自分だけでしていました。飼っている十頭以上の馬を、毎日早朝から世話していて、手入れの行き届いた馬達はとても美しかったです。車いすで十頭以上の馬の世話をすることは普通よりも時間が掛かって大変なのに、マザーはいつも楽しそうにやっていました。そんなマザーを見ていると、車いすだから、歩けないから、大変だから、手助けしてあげなくちゃと思ってた私の考えを恥ずかしく思うようになってきたのです。知らず知らずのうちに、車いすのマザーを障害を持った「弱い」「助けてあげなければならない人」と決めつけていたのです。

ある日、マザーが出場する馬術大会を見に行きました。マザーは慣れた様子で乗馬し、動かない下半身を丁寧に馬へ固定していました。マザーの順番になった時、その迫力には目を奪われました。猛スピードで走る馬を上半身だけで器用に扱う術を披露する彼女は、とてもかっこよく輝いていました。

「すごいでしょ？彼女昔はジョッキーだったのよ。」と隣に座って居た、マザーの友達が教えてくれました。競馬の騎手だったマザーは、落馬をして車いすの生活になったそうです。私は、もし自分が同じ経験をしたらどうだろうと考えました。きっと自分の色んな事に対しての行動を制限してしまうでしょう。ましてや、今まで懸命に取り組んでいた事がきっかけでそうなら、もう次への希望をなくしてしまう。車いすになった自分を情けないと恥じてしまうかもしれない。でもマザーは違いました。障害を持った自分に何が出来るか見つけ、何にでもチャレンジしてきました。障害がある分、人一倍の努力と相当な苦労があったと思います。今でも毎日スロープを使って歩く練習を続けています。障害を障害と思わず、常に自分自身を乗り越えているマザーは、誰よりも強い人だと思いました。その日から私は、マザーを手助けするのをやめました。自分の家でもしているような当たり前の手伝いだけをしていたら、マザーの方から、「しえ、ちょっとこれお願い。」と言ってくれる様になり、やっと家族の一員になれた気がしてとても嬉しかったです。日本では障害のある人を「障害者」と言う事が多いのですが、英語では「障害と共に生きる人」と言います。一番に「人」に焦点を当て全ての人に同じ権利がある事を強調しているのです。自分だけの浅い理解による手助けが無意識に障害を持つ人を弱い人だと決めつけてはいけません。それを教えてくれたのは車いすの自分にとっても自信を持っていて、車いすになるきっかけとなった馬の事ですら「馬は私の人生なのよ。」と話す、障害と共に人生を楽しむマザーでした。そんなマザーと過ごしてきた私だからこそ、見える物、感じる事、この先出来る事がきっとあると思います。私の目指す社会は「弱い立場の人を思いやる社会」ではなく、「弱い立場の人を作らない社会」です。障害の有無に壁を造らず、寄り添って同じ世界で私は生きていきたいです。